



優秀賞〈銀の星賞〉

アイーシャと奇跡の種

千葉県 麗澤高等学校三年

大場 あすみ

「おじさん！ アイーシャは来なかった!？」

階段を駆け上がり、僕は荒い息のまま、ゲート番のおじさんに向かって叫んだ。

「ムム、その声は……おお、レオ君じゃないか。久しぶり。元気か」

「挨拶は後でいいから！ ねえ、アイーシャがどこにも見当たらないんだけど！ あいつまさか、外に出たの?」

「……ムム」

いつ見ても眠たげなおじさんは、困ったように白い眉尻を下げる。

「僕、アイーシャを連れ戻さなくちゃ。ゲートを開けて!」

おじさんは目をしょぼしょぼさせながらパネルを操作して、ゲートを開けてくれた。

「おじさん、ありがとう!」

ゴーグルをきつちりとつけると、俺は砂漠の中へ飛び出した。

「アイーシャ!」

真っ赤な巻き毛の女の子は、すぐに見つかった。

灰色の砂嵐が吹き荒れる中、後ろでくくった髪を翻し、驚いたようにこちらを向いたアイーシャは、すぐにその顔をしかめた。

「なーんだ、レオか」

「何してんだよ、こんなところで。おばさんが心配して、お前を探し回ってるよ」

黒い大岩のもと、風を避けるように座り込んでいるアイーシャの手元を覗き込む。十一歳という歳のわりに小さな彼女の手には、ゴルフボール大の青い何かが握られていた。

「……なにそれ?」



「種よ」

「たね!？」

すっとんきょうな声を出した僕を得意げに一瞥して、アイーシャは両手で砂をかき分け出した。

「種って、あの、植物の種？ 教科書に出てくるやつ？」

「そう」

「へえー」

僕はまじまじとその青い種を見つめた。

「ちよっと触らせてよ」

「だーめ」

ちえ、アイーシャのけち。小さく舌打ちした僕を気にも留めず、穴を掘り終えたアイーシャは、種をその胸に抱きしめた。

「おじいちゃんの遺品の中から出てきたの。これはきつと、世紀の大発明に違いないわ」

そう呟つぶやいて、彼女は種を埋めた。

「これでよし、と」

満足げにすくと立ち上がったアイーシャに、僕は慌てて声をかける。

「アイーシャ、水は？」

「……え？」

ぽかんとするアイーシャに、僕は理科の教科書に書いてあったことをそのまま告げる。

「『水がないと植物は芽を出さない』よ」

「……………」

僕に指摘されたのが悔しいのか、アイーシャは乱暴な手つきで腰のバッグから水筒を引っ張り出し、それでも丁寧ていねいに、砂の上に水をかける。

「かけすぎるなよ」

「わかってる。一つ年上だからって大人ぶらないでよ、レオ」

足早に地下シェルターへと向かうアイーシャの背中を、僕は急いで追いかけた。



その昔、オアシスと呼ばれたこの地も、いまや他の陸地と同様に、砂漠と化していた。

僕たち子どもは、緑の森も、青い空も、海も、教科書の中でしか知らない。そもそも植物なんて、シエルター内で栽培された野菜くらいしか見たことがない。

「アイーシャ、あれ、何の種？」

シエルター内の真っ白な廊下を歩きながら、僕はアイーシャに尋ねた。

「……わからない。でも『奇跡の種』なんだって」

「キセキのたね？」

大きく頷いて、アイーシャは続ける。

「おじいちゃんの研究室を整理していたら、青い、綺麗な箱が出てきたの。開けてみたら、奇跡の種ってラベルと一緒に、あれが出てきたの」

アイーシャの唯一の肉親であったおじいさんは、先月亡くなったばかりだ。アイーシャが急に歩みを止めた。僕も隣で立ち止まる。

「……おじいちゃん、死ぬ前に言ってたんだ。『すばらしい植物を開発した、これで人類は助かるかもしれない』って」

「……あれが、その発明品かもしれないってこと？」

「私は、そうだと信じてる」

と、廊下の奥から、白衣をひらめかせてミス・バートンが歩いてくるのが見えた。彼女は僕たちの理科の先生だ。

「まあ、アイーシャじゃないのー！」

「……げっ」

顔をあげたアイーシャが、心底嫌そうな顔をして、踵かかとを返す。

「こらっ、逃げようとするんじゃないやありませんアイーシャ！ ちゃんと学校に来なさい！」

走り出したアイーシャと、その背を追いかけるミス・バートンを見送る僕の頭の中は、あの青い種のことではいっばいだった。

それからしばらくたったある夜、父さんが疲れ切った顔で、大人たちの会議から帰ってきた。

「父さんお帰り」



「ああ、ただいま」

病院棟で夜勤をしている母さんに代わり、僕は冷蔵庫から夕飯を出し、電子レンジにかける。

「ビール、これで最後だけだ。母さん、来週の配給にちゃんと頼んだかな」
ソファアにドスンと座った父さんは、ネクタイを緩めながら苦々しい口調で言った。

「本当にそれが最後さ。次の配給からはもう、ビールは来なくなる」

「ええっ?」

僕は驚いて、危うくビール缶を床に落としそうになった。

「今日の会議で、アルコール、ジュース類は今後一切製造禁止になった」

「嘘でしょう!?!」

「本当だよ、レオ。残念ながら」

名残惜しそうに、最後のビールを飲み干す父さんに、僕は何と言ったらいいのかわからない。

「……水の蓄えが、あと五年で底を尽く」

空き缶を弄もてあそびながら、父さんは乾いた声で呟いた。

「海は? 何十年か前までは、海の水をシエルターの中に引いてきてたって、ゲート番のおじさんが言ってたけど……」

「昔はな。でも今はできない」

「どうして?」

「塩分を取り除くことはできても、俺たちの今の科学技術では、海水の汚染物質を完全に取り除くことができないんだ」

「……おせんぶっしつ、って?」

「自然や人にとって、毒となるものだ。今の海は化学変化を起こしすぎて、あまりに毒を含みすぎている。どうしたって飲み水には使えない」

明日学校で、ミス・バートンに詳しく聞いてみなくちゃ。僕はそう考えながら、父さんに質問を続ける。

「じゃあ、……僕たち、どうすればいいの?」

「今のところはどうしようもない。一人あたりに配給される水の量を減らすしかないな。」

「先月も減らされたばかりなのに……」



賢治のまちから 高校生★電話大賞

「誰かが解決策を見つければいい。何とかして水をもたせなくちゃならない。……こればかりは、仕方がないことなんだよ、レオ」

父さんが僕の肩を叩く。濃いクマのできたその顔を見て、僕ははっと閃いた。
(人類を救う奇跡の種って、もしかして!)

「……水のなる木?」

「その種なんじゃないかと思うんだ!」

「……そうかしら……」

ゲート番のおじさんが、砂漠に出た僕たちに「氣をつけてな」と叫んだ。アイーシャと僕が種のもとへ通うようになって、もう五日目になる。ゆっくりゆっくり、慎重に種に水をまくアイーシャを横目に、僕は水のことについて考えていた。

「昔、人類がまだ宇宙に行ってたころ、スペースシャトルの中では、尿を水に変えてたって、この前ミス・バートンが言ってたんだ。その技術を取り戻せば、僕らはきつと生き延びられる!」

「……そ」

「だから僕は決めたんだ、今日から僕はその研究者になる! アイーシャはこの、水のなる木……かもしれない、奇跡の種を育てる! どっちかが僕らの、人類の未来を救うかもしれないんだ! すごいだろ!」

「……みたい」

「え?」

「馬っ鹿みたい!!」

アイーシャは突然、地面に向かって怒鳴り声をあげた。蒼い双眸がギツと僕を睨みつける。その目は、今にも溢れ出しそうなほどの涙を湛えていた。

「おじいちゃんが一生かけて作ったのが、たった一粒の種だったのに!」

たった五年で私達に何ができるっていうの!? 私たちみたいなただの子供に、何が変えられるっていうのよ!?

「……アイーシャ……」

「なんで、どうして芽が出ないの!!」

ばん、と地面に掌を叩きつけたと思ったら、アイーシャはそのままぐらりと横に倒れた。



「アイーシャ!？」

驚いて抱き起こしたアイーシャの体がものすごく熱くて、僕は一瞬、頭が真っ白になった。

病院棟に担ぎ込まれたアイーシャは、疲労と脱水症状と診断された。きつと種に水をやるために、今まで自分の分の飲み水を我慢していたのだろう。

(アイーシャの馬鹿……)

ひどいと精神障害を起こすかもしれない。看護師である僕の母さんは、アイーシャを個室のベッドに寝かせながらそう言った。

(アイーシャ……なんで僕に相談してくれなかったんだよ……)

点滴を打たれ、眠ったままのアイーシャの顔を、責めたいような、泣きたいような気持ちで見つめた。

— 私たちみたいなただの子供に、何が変えられるっていうのよ!？」

先ほどのアイーシャの言葉が、頭の中でひっかかっていた。

(そんなこと言うなら、アイーシャ、君はどうして毎日、種に水をやってたんだ？ あんなに真剣な顔をして……)

「アイーシャ、君が元気になるまでは、僕があゝの種に水をやるよ。アイーシヤが目覚ました時、安心できるように」

眠ったままのアイーシャの手を握って、僕はあゝの種を守ろうと、心に誓った。

「レオ、あなた、よく砂漠を出歩いてるんですって?」

僕がミス・バートンに呼び出されたのは、アイーシャの意識が戻った次の日のことだった。

「そうですね……、それがどうかしましたか、ミス・バートン」

「非常によくはないわね」

豊かな金髪をかきあげながら、先生は顔をしかめた。

「外は危険がいっぱいなよ。ドック内の人間が安易に外に出てはいけないうことは、あなたも知っていますでしょう? ……まあ、あなたたちはまだ子供だから見逃してもらえているけれど」

ミス・バートンは長い爪でこつこつと教卓を叩いた。



「……レオ、悪い友達と付き合ったせいで、優秀なあなたにまで悪い影響が及ぶのは、良くないわ」

悪い友達!? アイーシャが!? 僕は怒りで顔が熱くなるのを覚えた。

「アイーシャは悪い友達なんかじゃない!」

僕は靴をひっ掴み、教室を飛び出した。

僕とアイーシャが外に出るのを止めさせたがったのは、何も、ミス・バートンだけではなかったのだ。

「おじさん、どうして!？」

「ムム……悪いのお、レオ君……これも総会で決まったことなんじゃ。子どもであれ、総会からの許可なしにここを通すことはできない……」

総会、父さんも参加する、大人の会議。僕は大声でおじさんをなじった。

「昨日まで大丈夫だったことが、急に今日からだめだって言う! 大人は勝手だ、僕たち子供の声なんて、聞こうともしないじゃないか!」

「ムムム……すまんのぉ……」

どんどん小さくなっていくおじさんは、それでもどうしたって、ゲートを開けてはくれなかった。僕はたまらず、病院棟へ走っていった。

……アイーシャの病室のドアには、面会謝絶の札がかかっていた。

（どうしたんだ、アイーシャ!）

今の僕には、それがどうしても、大人たちの画策としか思えなかった。

（しっかりしろ、レオ!）

泣き出しそうな自分の顔を叩いて、僕は病院棟を後にした。

（大人たちに見つかりさえしなければ……そうだ、夜中に砂漠に出ればいい!）

僕はぎゅうっと拳を握り締めた。

夜の砂漠は、信じられないくらい寒かった。

ゲート番のおじさんが居眠りをしている隙に、僕はいつもおじさんがやっている通りにパネルを操作して、ゲートを開けた。

懐中電灯あたりを照らす。砂嵐は治まっているものの、昼と同じ、厚く立ち込めた雲のせいで、地上は闇に閉ざされていた。

（たしかこっちのほうだったはず………、って!）



僕は遠くに、小さな白い灯りを見つけた。

(まさか！)

砂に足をとられながら、僕は全速力で砂漠を駆けた。闇の塊のような黒い岩のもとにいたのは、やっぱり彼女だった。

「なにやってんだ、アイーシャ!!」

薄っぺらい病院服に包まれた肩を震わせながら、アイーシャはただひたすら、手ずから地面に水をかけていた。

「お願い、お願い……芽を出して」

「アイーシャ、水のかけすぎだ!」

僕はアイーシャの手首をつかんだ。バケツに溜めた水をずっと掬い続けていたせいで、その手はすっかり冷え切っている。

「黙って!」

ぼろぼろと涙を零しながら、アイーシャはまた僕を睨みつける。

「どうすればいいって言うのよ!？」

アイーシャが僕の手を振りほどく。

「おじいちゃんが能無し、誰の役にも立てなかった科学者だなんて、もう誰にも言わせたくないの! おじいちゃん、死ぬまでずっと後悔してたのよ!」

「この星を駄目にしてしまったのは、むしろ大人の責任だ。アイーシャ、お前は何も悪くない。子どもたちに申し訳ない!」
「って! いつもそう言うってた!」

音のない砂漠に、アイーシャの声が、どこまでも響いていく。

「そんなおじいちゃんが、『能無し』だったはずないじゃない! 発明は成功しなくちゃいけない、絶対に芽は出るはずなのに!」

それなのにどうして、どうして。地面に両手をつき、アイーシャは泣きじやくった……僕にはその背中をさすってあげることしかできない。

「あと五年、あるんだ……。アイーシャ、芽はきつと出るよ……」

アイーシャにそう言い聞かせる僕の声だって、信じられないくらいに弱弱しい。

(あと五年……たったの、五年!)

それが僕たちに残された時間。嫌だよ、僕たちその時、まだ十七と十六じゃないか。たったそれっぽっちしか生きられないなんて。



気がつけば僕も、声をあげて泣きだしていた。二人分の涙が、ぼたぼた、ぼたぼたと地面に落ちていく。すると……………。

—ふわり。

突然、砂の中から、小さな青い光が浮き上がってきた。

「……アイーシャ、これは…………？」

光は僕とアイーシャの周りをぐるりと一回りして、ふわふわと、宙を漂う。すると…………砂の中から、小さな芽が顔を出したのだ！

「わあっ、レオ見て！ 芽が出たわ！」

芽は光を追って、どんどん伸びていく。緑色の茎がやがて茶色の太い幹となり、みるみるうちにそこから枝が伸び、大きな葉が茂っていく。

「そうか、塩水だ！」

「塩水？」

すつとんきょうな声をあげた僕に、アイーシャは首をかしげた。

「この木は、たくさん塩水があるところで芽を出すんだ！ なんで気がつかなかったんだらう？」

白み始めた空の下、僕は木の根元の砂が、灰色から、だんだん砂本来の黄色に戻っていることにも気がついた。

「もしかしたらこの木、汚染物質を吸収して成長しているのかもしれない！」

「……おせんぶつつしつを、きゅーしゅー？」

分からない単語に眉根を寄せたアイーシャの頭を、僕はぐしゃぐしゃとかき回した。

「わっ、なにすんの!!」

「これは世紀の大発明だよ、アイーシャ！」

目を合わせてそう言ってやれば、きよんとした後、彼女はいつも通りの勝気な表情を見せた。

「当たり前じゃない！ 私のおじいちゃんの発明なんだもの！」

アイーシャの、まだすこしだけ涙の残った青い目が、朝の光を映してきらきらと輝いている。ああ、きつと青空って、こんな色をしているんだろうな。

アイーシャと、伸びていく奇跡の木を眺めながら、僕はそう思った。